

「そのあわれみは、代々限りなく」

詩篇 第103篇 14節～18節
ルカによる福音書 第1章 39節～56節

説教 岡村 恒牧師

「そのあわれみは、代々限りなく／主をかしくみ恐れる者に及びます。」(50節)ルカによる福音書でクリスマスに響く4つの讃美歌の一つ、マニフィカートです。この讃美歌は、クリスマスの深い意味、神が私たちをどれほど深く愛して下さっているかを明らかにしています。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。」(46～47節)〈大きくあがめます、私の魂は、主よ〉という語順で、主の母マリヤの口から讃美歌があふれ出てきました。神の約束を聞いて、神を信じて歩むことができた良いのですが、神は、この約束の言葉に加えて具体的な〈しるし〉をお与えになりました。具体的な体験がなくては、私たちの信仰が簡単に吹き飛んでしまうからです。

エリサベツの妊娠から六ヶ月後、ナザレ村のマリヤのところに天使が現れ、マリヤの処女受胎という驚きの知らせを告げました。そして同時に、エリサベツの妊娠を告げます。マリヤはいてもたってもいられなくなり、急いでエリサベツのところへ向かいました。天使の御告げに対して、「お言葉どおり、この身に成りますように」(38節)とお答えしたマリヤですが、神を讃美し始めたのは、エリサベツに会い、そのお腹を見てからのことでした。もしかしたらエリサベツのお腹に手をあてて触れ、神の全能を確認して初めて口を開いたのかも知れません。

信仰とは、私たちの心の中の思いや決断の話ではありません。家で一人で聖書を読んで、心の中で神を信じていれば救われる、というのではないのです。神への信仰をはっきりと口で告白し、罪の赦しの洗礼を受けて、具体的な信仰生活を他の信仰者たちと一緒に歩いていくことが、私たちにはどうしても必要なのです。

主イエスは最初から12人の弟子をお召しになり、信仰の群れを準備されました。信仰者は、祈りの群れの中で生きるからです。主イエスは、様々に異なった人を集め、弟子たちが具体的な生活を経験していく中で、神の力を目にし、神の御言葉を味わうようになさいました。弟子たちが二人組で派遣された時、彼らには病人をいやし、悪霊を追い出すことができました。それほどの経験を重ねながら、主が逮捕された時、弟子たちは一人残らず逃げ出してしまいました。しかし、彼らが一緒に集まっている時、復活された主イエスは彼らの所に来て下さいました

また、弟子たちが一緒にいる時に、約束の通りに聖霊が注がれて、弟子たちは福音を宣べ伝え始めました。弟子たちは一緒に祈り、一緒に讃美歌を歌い、一緒に福音を宣べ伝えたのです。

大阪教会も、1874年5月24日、信仰共同体が生まれた時に誕生しました。具体的な生活を共に過ごす交わりの中で、福音が宣べ伝えられ、信仰者が生み出され、信仰を支えるしるしが与えられてきました。信仰者の群れの中で、神の恵みが味わわれ、私たちの口が開かれました。「わたしの魂は主をあがめます。」(46節)のあがめるという言葉は、【大きくする】という言葉です。私たちは神を小さくしてしまうのですが、神の絶大な力を目の当たりにする時、神の大きさを告白するようになります。救いが、自分自身の信仰や決断によってではなく、ただ全能の神の力によること、恵みによることを信じて、神の力を讃美するようになるのです。

マリヤは不安と恐れを抱いていたかも知れませんが、しかしエリサベツに会った途端、神が全能であり、あわれみ深く、恵みに富むお方であることを信じることができました。そして口を開いて神を大きくし、ほめたたえたのです。

礼拝の中で、私たちは神の御言葉を聞き、救いを与えられます。そして、この聖堂を後にして歩み出す時、私たちは神が与えて下さるしるしに出会います。神が生きておられ、全能であり、私たちひとりひとりをあわれんで下さっていることを知ります。神が、日常生活のいたる所にしるしを用意して下さいます。道端の花に、鳥の声に、自分自身の人生に起こるさまざまな出来事の中に、私たちは神のあわれみと恵みとを発見します。

神が私たちを御心に留め、あわれみ、その愛で包み込んで下さっています。私たちにも、この事実を知り、喜び、感謝して生きることが出来ます。マリヤの讃歌は、マリヤと共に、私たちをこのような信仰生活へと招き入れます。

ただ神のあわれみによって、私たちに信仰が与えられ、支えられています。具体的なしるしとして聖餐の食卓が与えられています。目で見、手で触れ、舌で味わう神の恵みのしるしを感謝して受け、主を讃美しながらあゆみましょう。

(記 岡村 恒)